

デカルトの永遠真理創造説についてのノート(上)

山 田 弘 明

デカルトの永遠真理創造説（以下、創造説と略称することがある）については多くの論点がありえる。本稿（上）では問題の全体像について筆者なりの見当をつけることとする。そのうえで次稿（下）では、神は矛盾をなしうるかという問題をメランアテ書簡（1644.5.2）の解釈を中心に考察し、この説のユニークで鋭い点を浮き彫りにしたい。

一 永遠真理創造説の全体像

創造説は多くの問題を含み、懐疑の射程、循環、神の自由、欺く神、真理の基礎づけなど、多くの主題に重なってくる。それだけに諸説がありフランスでは長い研究史がある。E.ブートルーをはじめとして、E.ブレイエ、E.ジルソン、H.グイエ、M.ゲルー、F.アルキエ、G.ロディス・レヴィス、J.-M.ベイサッド、J.-L.マリオンなどがある。米国ではH.フランクフルト、E.カーリーなどがあり、日本でも野田又夫をはじめ多くの議論がなされている。ここではテキストを示しながらこの説の全体像について筆者なりの見通しをつけ、その位置づけを考えておくにとどめる。

(1) テキストの確定

デカルトは永遠真理について多くの箇所が多様な仕方で語っており、その全体像を捉えることは容易ではない。永遠真理創造説とは何か、どこまでを創造説と認めるか、それはどのテキストのどこに表明されているか。テキストを定め概念の整理をすべきである。テキストの確定は意味の確定と連動し、解釈にも関わってくるであろう。周知のように真理は神によって自由に創られ定められたとするのが、デカルトの永遠真理創造説の骨子をなす最も標準的な意味である。だがこの説にはさまざまなヴァリエーションがある。数学的真理・物理的真理・論理的真理としての永遠真理、神の意志が真理を決定すること、神が真理の源泉であること、神は非決定であること、神は人間の目には矛盾であることをもなしえること、神の知性と意志とは同一であること、神の無限の力は人間には理解できないこと、などである。ヴァリエーションの範囲をどこまで認めるかが問題だが、ここでは最も広義にとっておきたい。この説を最も緩やかな意味に解した場合、関連テキストの全箇所を時代順に抽出すれば、次の表のように整理されると思われる。

番号	テキスト	内 容	AT版の頁 および行
(1)*	ヌルセンヌあて書 簡(1630.4.15)	永遠真理は神に依存する。われわれは神を理解できないが認識できる。神は真理を変更できるか。	I.144:08-146: 19
(2)	ヌルセンヌあて書 簡(1630.5.6)	神が永遠真理を真で可能であると知るがゆえに、それは真で可能である。神において知ることと欲することは一つである。	I.149:21-150: 27
(3)*	ヌルセンヌあて書 簡(1630.5.27また 6.8)	全能的創造因により神は永遠真理をなした。神は物質の作者である。神にとって神学上の真理を真にできないようにすることは真前であった。	I.151:02-153: 03
(4)*	ベークマンあて書 簡(1630.10.17)	神にもできないことがあると人が言う場合、私は天使にはできないとだけ言う。	I.165:16-29
(5)	争論論VII(1638)	永遠真理は、神がすべてを数と重さと大きさによって創ったことを教える。	XI.47:04-28
(6)	ヌルセンヌあて書 簡(1630.5.17)	神がその設定しをすれば永遠真理は真理でありえない。	II.138:01-15
(7)	方法序説IV(1638)	真理は神に由来するかぎり真である。	VI.38:15-24
(8)	方法序説V	神は偶然のうちに法則を立て、われわれの精神に刻み込んだ。(cf.方法序説VI.63:31-64:05)	VI.41:11-13
(9)*	省察 I. (1641)	全能の神が存在する。この神は私が2に3を加えるたびに、私が誤るように仕向けたのではないか。	VII.21:01-11
(10)	省察 I.	真理の源泉である最善の神。	VII.22:23-24
(11)*	省察 III.	全能の神が私を欺いても、 $2 + 3 \neq 5$ は明白な矛盾。	VII.36:12-21
(12)	省察 IV.	真なる神は知識と知恵の宝庫である。	VII.53:19-21
(13)*	省察 IV.	明晰判明な知識の作者は神であるがゆえに真である。神が欺瞞者であることは矛盾である。	VII.62:15-20
(14)*	省察 V.	存在なき神を考えることは、谷なき山を考えることと同様、矛盾である。	VII.66:12-15
(15)	省察 V.	すべてが真なる神の認識に依存する。	VII.71:03-04

番号	テキスト	内 容	AT版の頁 および行
(16)*	省察VI.	明白に矛盾するものだけは、神によって創られることが不可能と判断した。	VII.71:16-20
(17)	第六答弁(1641)	真理は神にも独立でなく、神がそれを欲したから存在するだけである。	VII.380:01-13
(18)*	第六答弁n.5(1641)	人が神によって欺かれるのは矛盾である。	VII.428:10-12
(19)	第六答弁n.6	神の意志が神自身で定めたことは矛盾である。神がそれ等の真理を欲する。	VII.431:26-433:10
(20)*	第六答弁n.8	神は1と2を1で真でない限り認めることもできなから、われわれは真偽を区別できない。	VII.435:22-436:25
(21)*	ジビューあて書簡(1642.1.19)	谷なき山、アトムは矛盾である。	III.476:14-477:09
(22)*	xあて書簡(1642.3)	神がその存在を失うことは矛盾である。	V.546:05-06
(23)*	マゾフあて書簡(1644.5.2)	神は自己矛盾を許す自由があり、三角形の内角の和が二直角であるより大きいこともまた可能なし。三角形になるものが問題するべきではなかった。	IV.118:06-119:14
(24)*	レギウスあて書簡(1642.6)	神は自分の全能をとり除くことはできない。	III.567:24-25
(25)	哲学原理(1644) I.22-24	神は全知全能であり善と真理の源泉。すべてを理解し意志する。神のみがすべての真なる原因である。	VIII.1.13:14-14:18
(26)*	哲学原理 I.29	神がわれわれの誤謬の原因であることは矛盾である。	VIII.1.16:11-13
(27)	哲学原理 I.49	公理としてのみ永遠真理。『無から何物も生じない』など。	VIII.1.23:25-24:06
(28)*	エリザベトあて書簡(1645.11.3)	神が神の意志に依存しないような本性として人間を創ったことは矛盾である。	IV.332:19-24
(29)	ピュルマンとの対話(1648.4.16)	神は変易不能。神はものを永遠の昔から裁定。	V.166:14-28
(30)*	アルノーあて書簡n.6(1648.7.29)	神は不可能なし。空虚、谷なき山、1+2=3も成り立たない。われわれにとって矛盾するだけである。	V.223:20-224:17
(31)*	モアあて書簡(1649.2.5)	神は空虚やアトムを創りえたが、それはわれわれには矛盾である。(cf.哲学原理II.18)	V.272:25-273:09

AT=Œuvres de Descartes, publiées par Ch.Adam et P.Tannery. Nouvelle présentation Paris 1996

表中の濃い網かけの部分は、永遠真理創造説の本体またはその一部と見なされる第一次資料である。狭義には創造説とはこの部分を指す。網かけの薄い部分は、創造説そのものではないが、この説の痕跡を残す第二次資料である。広義の創造説は第二次資料を含めてよいと思われる。その他の部分は、必ずしも創造説には直接関与しないが、「神は矛盾をなしうるかどうか」についての言明を集めた参考資料である。*はその主題に関わるテキストを示し、本稿にとって重要と考えるものである。この表の作成に関しては、マリオンの図式、ロディス・レヴィスの指摘、ペイサッドの議論など^{注1}を勘案したが、最終的には筆者の見方によっている。本稿の目的は各テキストの詳細な検討にあるのではない。テキスト確定の論拠を示しながら、永遠真理創造説の全体像を概観しておきたい。

1630年のメルセヌヌあて四書簡 (1) (2) (3) (6) は、この説の本体を表明した重要な第一次資料と見て差し支えないであろう。第一書簡 (1) では、オランダに居を定めた (1628年の) 最初の9か月間は、自然学の基礎としての「形而上学のはじまり」論文に没頭したことに触れ、自然学においても形而上学の問題に言及せざるをえないとして、はじめて永遠真理の話をしている。永遠的と呼ばれる数学的真理は、王が国に法令を敷くのと同じように神によって定められたこと、それは人間精神に生得的であること、他の被造物と同じく全面的に神に依存すること、神の意志は自由だが神の定めた真理は永遠不変であること、神の力はわれわれの理解を越えること、などが印象的に述べられている。第二書簡 (2) では、神がそうと知る (欲する) がゆえにものが真理でありえること、神の存在は第一の永遠真理であって、それを抜きにしてはものは真理ではありえないこと、などが示される。第三書簡 (3) では、永遠真理を創ったのは全体的作用因としての神であること、神は存在だけでなく本質 (永遠真理) の作者でもあること、神にはわれわれが理解している幾何学の真理を真理でないようにすることも自由であった、と認識が次第に深まって行く。第四書簡 (6) は公理をはじめとする真理の設定が神に拠っていることの確認である。これらの書簡は永遠真理創造説の核心をなしていると言えるだろう。ある意味で、この説のすべてがここに集約されていると言える。後のテキストにその発展形態は見出しされるであろうが^{注2}、これが出発点であり、ここにすべてが織り込まれていると考えられる。ただ、なぜそのような説を立てるか、その機縁となった無神論者の書が何であったかは、これらのテキストだけでは読みとることはできないが^{注3}、「神の自由」を最大限に広く解釈しようとする主張が根本にあったことは確かであろう。

神が真理を永遠なものとして創ったという考え方自体は、もとよりキリスト教の伝統による普通の考え方である。アウグスティヌス、トマスにすでに存在し、スコトゥスやスアレスにもあることは哲学史家によって指摘されている。問題は神が真理を自由に創ることができたか否かである。神といえども真理を勝手につくれない、という説をとる人は圧倒的に多かった。真理は神の知性に基礎を置いているので、 $2 + 2$ はあくまで4であり、神もこの真理を犯すことはできないし矛盾律にしたがう、と考えるのが正統的スコラの解釈であった。ところがデカルトは、真理は

神の意志に基礎を置いているので神は真理を自由に創ることができた、それゆえ全能の神は2+2が4でないようにすることもできた、と考える。これは伝統に反するだけでなく、西洋17世紀の一般的な考え方にも反する。スピノザ、ライプニッツ、マルブランシュ、パスカル、ガッサンディは、永遠真理創造説そのものは認めても、そのデカルト的理解（主意主義）にはこぞって反対している¹⁴。それゆえこれは歴史的に見ても特異な説であり、マリオンを試みたように、この点にデカルトの大きな独自性を見ようとする解釈は基本的に間違っていない。

ところで永遠真理創造説は、神が真理を自由に定めたということ以外に、いろいろな意味の広がりをもっている。『宇宙論』(5)は、自然学の法則や数学の証明は永遠真理にもとづいており、それは神が世界を数、大きさ、重さにしたがって創ったことを教えている。それはわれわれに本性的であり可能的世界においても真である、とする。このテキストは、永遠真理が生得的かつ普遍的な真理（公理）として、数学的真理や自然法則の根拠になっていることを述べており、創造説と自然学との深い関わりを示している。公理としての永遠真理の例としては、『哲学原理』(27)では「無からは何ものも生じない」「同一のものが同時に存在し、かつ存在しないことは不可能である」「いったん起こったことは、起こらなかつたこととはなりえない」などがあり、メルセンヌあて書簡(6)では「全体は部分よりも大きい」が挙げられている。

『方法序説』(7)、『省察』(10)(12)(15)、『哲学原理』(25)では、「神は真理の源泉である」「真理は神に由来する」などの主張がなされている。たしかにそれは永遠真理創造説の重要な一面を述べている。そこで、ロディス・レヴィスは『省察』や『哲学原理』にもこの説を発見しようとする。だが、それらのテキストは創造説を正面から論じた積極的な主張ではなく、その面影を示しているにとどまる。それは神による真理の自由な設定という創造説の主題の展開ではなく、その変奏にすぎないからである。それゆえ第一次資料とは見なさないでおく。この種の第二次資料は、ここに掲げたもの以外にもありえるであろうが、それらは要するにこの説の痕跡を残すにすぎない。

これに対して『方法序説』(8)は重要な第一次資料である。永遠真理は自然(nature)のなかに法則を立てたと言う場合、それは人間本性に刻まれた生得的な法則であると同時に、自然法則でもあると考えられる。自然学においても形而上学の問題に触れざるをえないとしたメルセンヌあて書簡(1)と基本的に同じ主張である。その書簡では「この法則を自然(本性)のなかに定めたのは神である」と記されている。(8)で自然学の話が入って来るのは、『宇宙論』(5)でも示唆されたことであり、きわめて自然なことと思われる。その出発点からして、永遠真理創造説は自然学と形而上学との接点にある思想であったことを想起すべきである。なおマリオンは『方法序説』(7)をも主たるテキストに数えているが、真理が神に由来するという言明は、上述したように第二次資料にすぎない。

『省察』の答弁(17)(19)(20)も浩瀚にして重要なテキストである。永遠真理創造説に関しては、『省察』本文よりもむしろ答弁の方が雄弁である。第五答弁(17)は、数学的真理は神か

ら独立しているのではなく、神がそう欲しそう設定したがゆえに永遠不変であるとする。第六答弁n.6 (19)、では、神の意志は永遠の昔から非決定であってもものに優先する、世界の創造や幾何学的真理は神の意志によりそう設定されている、とされる。同じn.8 (20) では、真理や善の根拠が神に依拠する、神には、われわれの理解を越えること（たとえば $4 \times 2 \neq 8$ ）をなすのは容易であった、と主張される。これらはいずれも創造説の基本線に沿った主張であるが、より明快にかつ具体的に展開されるようになってきている。それらは、『省察』の時期にもデカルトが創造説を維持していたことの、まぎれもない証拠である。

メランアて書簡 (23)、アルノーアて書簡 (30) はさらに明快である。前者 (23) では、真理の決定に際して神は矛盾をもなしうるといふことの説明として、神は非決定であること、それはわれわれの理解を越えていること、神の知性と意志とは一つであること、が再び力説されている。ここには「永遠真理」という言葉こそないが、創造説の根本が最も鋭い形で現われており、次稿(下)で詳しく取り上げる由縁である。後者 (30) は短いものであるが、すべてが神に依存するゆえに神には不可能なことはなく、その全能をもってすればわれわれには矛盾であること（谷なき山、 $1 + 2 \neq 3$ ）もなしえんとする。このテキストも (23) に接続する第一次資料である。

デュルマンとの対話 (29) は、神が永遠の昔から不変であることを中心としてさまざまな主張を記述しているが、創造説そのものを主題的に展開したものではない、また、これはデカルト自身の筆によるテキストではないので、マリオンにはしたがわず第二次資料としておく。

以上を要するに、永遠真理創造説は若い時代 (1630年) から晩年 (1648年) にいたるまで、デカルトのテキストに一貫して存在すると結論できる。その説の内容がはっきりと表に出ているのが第一次資料であり、明瞭に出てはいないがその痕跡をとどめているのが第二次資料である。その間、神の「全能」が「非決定」と解釈し直されたり⁴⁵⁾、神が「真」の根拠だけでなく「善」の根拠にもなってくるなど、思想的な発展があることは当然だろう。だがその基本的な主題は1630年のメルセンヌアての四書簡に凝縮されていると考えられる。この説がデカルトの形而上学と重要な関わりがあることは疑いない。ただそれが形而上学の論理的脈絡にどこまで関わってくるかが問題である。

(2) 永遠真理創造説の位置づけ

では、永遠真理創造説をデカルト形而上学のなかでどう位置づけるべきであろうか。

その前に注意しておきたい点がある。それは、この創造説は独立峰のように体系から孤立してあるのではない、ということである。この説は神についての潤沢な思想の関連のなかで語られていると考えられる。すなわちこの説は、神の完全性、不変性、単純性（一性）、善性、不可解性、広大無辺さ、全知全能、自由など、神の諸属性と密接に関連していると思われる。創造説を取りあげることは、デカルトの神についての思索の全体を芽づる式にとり出すことでもある。それゆえ、神についてのさまざまな思考との有機的なつながりにおいて、この説を問題とすべきである。

たとえば連続的創造説 (Théorie de la création continuée) というものがある。それによれば、ものが存在を維持するということは、たえず新たに創造されていることであり、われわれの存在だけでなく物質の存在も神に依存している。すべてのものは「神なしには一瞬たりとも存続しえない」(Discours.IV.AT.VI.p.36)。これは明らかにスコラの伝統をひく思想であるが、連続的創造説は永遠真理創造説と連絡し、相通じるところが多い。この説もまた形而上学と自然学とを連結すると考えられる。このように永遠真理創造説は決して孤絶した思想ではないし、それだけを捉えて議論することは、必ずしも適切ではない場合があるのである。

さて、この創造説の位置づけについては、二つの極端な解釈があると思われる。ゲルーとマリオン¹⁶の解釈がそうであるが、どちらも採用できないと考えられる。ゲルーの解するところでは、この説は神の不可解性というテーマから派生したものであり、『省察』には必要がない^{16b}。つまり、これはメルセンヌあての書簡などに現われた若い時代のものにすぎず、デカルト形而上学の本筋に関せぬ枝葉の議論である。この解釈は一面の事実を突いている。だが現在の研究レベルでは、ゲルーの見方はもはやとりえないだろう。創造説は形而上学において重い意味があり、その根本に根を張る重要思想である。上の表からも分かるように、創造説はよく見ればテキストのいたるところに隠れてあり、『省察』にも影を落している。それは決して派生的なものではなく、欺く神、懐疑の射程、循環問題、神の自由、真理の基礎づけなど、デカルト哲学の重要主題に重なってくるものである。しかも形而上学と自然学とを連結する橋でもある(このこと自体はゲルーも認めているが)。

これとは反対に、アルキエは永遠真理創造説がデカルト哲学にとって重要であることを認め、それは形而上学の核心であり鍵をなしているとする。ロディス・レヴィスもこの解釈を肯定的に受けとめながら、創造説を『方法序説』『省察』『哲学原理』などのテキストにおいて新たに発掘し、形而上学と自然学とを結ぶ重要な理論とする¹⁷。こうした見方を強力に押し出したのがマリオンである。かれは創造説がデカルトの形而上学において死活の意味をもつとする。すなわち、この説の根本にある「神の不可解性」という思想は、神と被造物との間に成立していた中世以来のアナログアや存在の一義性を破棄する決定的な切り札となっており、デカルトの形而上学が独自の意味を有するのは創造説においてである、と見る。たしかにマリオンのような哲学史の解釈は可能であり、コードの任意性や、神についての合理的な理解の不可能性ということもあるであろう。ただ、ロディス・レヴィスも指摘するように、神の不可解性を恣意的とするのは不合理性につながるゆえに避けるべきであろう¹⁸。

これに対してわれわれは第一に、永遠真理創造説は単にそう主張されているだけで、何の証明もないドグマであり一つの仮説にすぎない。第二に、しかしそれは形而上学の重要な背景になっており、その上に形而上学という図が描かれる地(ち)になっている、と考える。以下これらの点を明らかにしておきたい。

第一の問題について言えば、創造説はメルセンヌあて書簡などにおいて、神が真理を創った云々

という仕方やや独断的に語られているが、神が存在するか否か分からない時点では、論理的効力はまったくないと言うべきである。むろん個人あての私信等においては、神の存在は当然の前提であり、そうした論理的配慮は無用かも知れない。だが、デカルトの哲学体系においてこの説の位置づけを考える場合、神の存在証明なしには創造説を論理的に語りえないはずである（オランダで準備した「形而上学の小論文」では神の存在が論じられており、これを踏まえれば問題はなかったかも知れない）。後の『省察』は次のように言っている。「神があるかどうか、もしあるとするなら欺瞞者であるかどうかを吟味しなければならない。この二つのことが知られないかぎり、他の何ごとについても確信をもてない」（*Meditationes*.III.AT.VII.p.36）。演繹的論理からすれば、ライブニッツ¹⁸のように創造説によって神の存在証明をするなどは明らかな論点先取である。それゆえ神の存在証明を抜きにした（あるいは当然の前提とした）文脈では、この説はドグマないし仮説とせざるをえない。証明を抜きにすれば、「真理は神によって設定された」という命題と「真理は人間による規約にすぎない」という命題とは、論理的に等価になってしまうであろう。

もしそれを論理的な意味をもって語るとするならば、第三省察で神の存在証明の終わったあと、神の属性を吟味する時点で創造説を展開してもよかった。あるいは存在論的証明を展開した第五省察の最後で「他のすべてのものが神に依存する」ことが話題になる折に、この説を明確な仕方でも挿入してもよかった（あるいはすでに入っていると解釈することもできる）。そうすればテキスト（15）の「あらゆる知識の確実性と真理性とが、真なる神の認識に依存する」（*Meditationes*.V.A.VII.p.71）という結論がさらに強化されたはずである。そのように、演繹的秩序にしたがった記述のなかで語られたならば創造説は仮説にならなくて済むのだが、デカルトはなぜか（神学的理由からか）そういう書き方を拒否しているのである。

永遠真理創造説は、デカルトの主著のなかではほとんど議論がなされていない。知人への書簡や答弁などで、部分的に語られるのみである。その片鱗は『省察』にも『哲学原理』にも見い出されるが、形而上学の表舞台で議論されることはついになかった。もしそれが一貫してデカルト哲学の根底にある重要な思想なら、なぜ表立って詳論することをしなかったのか。その理由は、この説はまだ仮説の段階であり論理的な整備が十分できていないので体系のなかで主張するには無理があったから、と思われる。デカルトは、この説を「はばかりことなく確言し広言すべし」（*A Mersenne 15 avril 1630*.AT.I.p.145）とは言いながら、実際には仲間や論争相手にだけ詳しく説明したにとどまる。そこから言えることは、かれが公にしたテキストにおいて明確に述べなかったことを、あまり深く詮索すべきではないということだ。『哲学原理』は次のように注意している。「明らかに私の著作のうちに見い出されないような見解は、決して私の説としないでいただきたい」（*Principes*.préface.AT.IX-2.p.20）。それゆえ、創造説は重要ではあるが、この説にあまりに大きな比重を置くマリオンの解釈には賛成できない。

第二の問題に移ろう。永遠真理創造説は証明されていない一つの仮説にとどまるからといって、

デカルト形而上学においてそれが占める位置がないわけではむろんない。アルキエは、ゲルーにしたがって、この説は『省察』(少なくとも初めの二つの省察)においては論理的意味はゼロとするが、経験の観点からはすべてだとする¹¹⁰⁾。ここでの問題は存在論的経験を問うことではなく、形而上学において演繹論理的にはさしたる意味のなさそうなこの説をどう扱い、どう位置づけるかである。われわれは、永遠真理創造説は形而上学の脈絡そのものには論理的に関わらないが、形而上学的思想がそこから湧出する根拠をつぶさに説明しており、その意味でそれはその上に形而上学という図が描かれる地であると考ええる。

永遠真理創造説がなかった場合との違いを考えてみるに、それがなくても形而上学的省察は論理的に成立するであろう。エゴ、神、外界の存在は確保されるであろう。だが創造説なしでは、そこで展開される形而上学の議論の背景が不透明になるのではないか。たとえば、いかにして数学的真理をも疑う誇張的懐疑が発想されたのか、なぜ欺く神というものが持ち出されたのか、神の誠実とか自由の根拠は何か、などである。創造説という素地があってはじめて形而上学の主題が闊達に展開されたと考えられる。

実際、創造説を背景に置くとその輪郭がはっきり見えてくる主題が多くある。たとえば、テキスト(9)に示したように第一省察では $2 + 3 \neq 5$ とする「欺く神」が構想されているが、その発想の根拠には、神が自由意志によって数学的真理を真理として設定したという永遠真理創造説がある¹¹¹⁾。(3)(20)(23)(30)がそれに相当する地の文章である¹¹²⁾。欺く神の仮説は、真理の根拠が神の意志によって支えられていることを示唆し、無神論者の幾何学者がなぜ「真なる知識」をもちえないかの理由を説明している。だがそれは「真理の源泉である最善の神」(10)の裏返しであって、神は逆に真理の強力な保証人となるのである。

同じことは矛盾律についても言える。誇張的懐疑は「精神の眼でこのうえなく明証的に直観すると思うことがら」(*Meditationes*.III.AT.VII.p.36)にまで及ぶが、それは公理を含むかどうかしばしば議論される。だが、永遠真理創造説を下地において考えるなら、明らかに公理も懐疑の射程のなかに入っていることが分かる。テキスト(23)がそれを明示している。公理を設定したのは神であり、神はわれわれの目からみて矛盾をまなしうからである。神は矛盾律をも破る絶対的自由を持っていることが裏書きされている。このように創造説は形而上学的懐疑の根拠になっている。

さらに明晰判明の規則がそれだけでは成立しない理由として、『方法序説』(7)は、その規則は「神があり存在すること、すべてが神に由来するがゆえに确实である」。逆にそれを知らなければ「われわれのもつ観念がいかに明晰で判明であろうとも、その観念が真とは保証されない」とする。だがなぜそう考えるのか、真理は神とは独立にありうると考えてはなぜいけないのか。ここでは簡単な記述にとどまっているが、唐突とも思われるこの部分の論拠を説明するのが、メルセンヌあて四書簡(1)(2)(3)(6)であろう。真理は神が設定したが、それが真であるがゆえに神によってそう設定されたのではなく、神がそう設定したがゆえにそれは真である。誠実な

る神による設定ということがあってはじめて、真理が真理として基礎づけられるのである。

以上のように、永遠真理創造説は形而上学の演繹的論理には直接関わらないにしても、その背景になる論拠を形成している。この説を踏まえてはじめて、形而上学の議論がよりよく説明される。その意味で、創造説が地になってその上に形而上学が描かれていると言えるのではないか。それは形而上学というポリフォニーのいわば通奏低音をなしていると言ってもよい。デカルト形而上学の体系のなかで、創造説をこのように位置づけることができると思われる。

註

- ^{†1} J.-L.Marion, *Sur la théologie blanche de Descartes*. 1981 pp.270-271. G.Rodis-Lewis, *L'œuvre de Descartes*. 1971 pp.125-140. J.-M.Beyssade, *La philosophie première de Descartes*. 1979. pp.101-128. なお、村上勝三『デカルト形而上学の成立』(勁草書房1990)第一章には、永遠真理創造説についての熟慮された記述がなされている。小林道夫『デカルト哲学の体系』(勁草書房1995)にも、歴史的研究を踏まえた永遠真理創造説についての緻密な分析がある。
- ^{†2} ベイサッドもマリオンもテキストを発展的に見ていて、筆者もその限りでは賛成であるが、永遠真理創造説のすべてが1630年のこれらの書簡のうち胚胎しているというのが筆者の見方である。なお村上はメルセンヌあての書簡(1630.11.25)も永遠真理のテキストとするが(村上勝三、上掲書 pp.18-19)、それは「形而上学の小篇」には関わっても永遠真理には直接関係していないので、ここでは採用しない。
- ^{†3} マリオンは、メルセンヌに宛てて神学の諸問題を論じたバークマンの書簡(1630.4.30)をその背景の一つに見ているが(J.-L.Marion, *Op.cit.* pp.163-166)、これは有力な手がかりと言えよう。
- ^{†4} 最近の研究としては、L.Devillairs, *Descartes, Leibniz. Les vérités éternelles*. 1998. M.Osler, *Volonté divine et vérité mathématique: le conflit entre Descartes et Gassendi sur le statut des vérités éternelles* (S.Murr.ed.*Gassendi et l'Europe*. 1997)
- ^{†5} J.-M.Beyssade, *La philosophie première de Descartes*. pp.86-105
- ^{†6} M.Gueroult, *Descartes selon l'ordre des raisons*. 1968 I.p.17,24-25
- ^{†7} F.Alquié, *La découverte de l'homme chez Descartes*. 1950 p.87-. Expérience ontologique et déduction systématique dans la constitution de la métaphysique de Descartes, in *Cahiers de Royaumont, Descartes*. 1957 p.30. G.Rodis-Lewis, *L'œuvre de Descartes*. pp.125-140. *Textes et débats*. 1984. pp.319-333. *Idées et vérités éternelles chez Descartes*. 1985 pp.119-138.
- ^{†8} マリオンは永遠真理創造説を中心に据えた独自で壮大なデカルト解釈をなしている(J.-L.Marion, *Op.cit.*)。G.Rodis-Lewis, *Textes et débats*. p.321.
- ^{†9} W.G.Leibniz, *Monadologie*. 43-45
- ^{†10} F.Alquié, Expérience ontologique et déduction systématique dans la constitution de la métaphysique de Descartes, in *Cahiers de Royaumont, Descartes*. p.30
- ^{†11} これはブートルー以来の古典的な解釈である。たとえばグイエは「欺く神の・・・背後から永遠真理の創造者が出現する。・・・それは同じ一つの思惟の二つの動きにすぎない」としている(H.Gouhier, *Essai sur Descartes*. 1949 p.185,189)
- ^{†12} (20) (23) (30) は時間的に第一省察(9)の後に来るテキストであり、それらによって「欺く神」を解釈することは許されないかも知れない。だが(9)の時点で(20) (23) (30) がすでに構想されていたと考えることも論理的に可能である。もっともここでの問題は、創造説がどのような時間的順序で記述されたかではなく、結果的に創造説が体系のどこに位置づけられるかである。

(付記)

永遠真理創造説の文献についてはおびただしいものがある。冒頭に列挙した研究史のうちで本稿では詳しく取り挙げなかった文献を掲げておく。

E.Boutroux, *De veritatibus aeternis apud Cartesium*. 1874.

(*Des vérités éternelles chez Descartes*. Tr. par G.Canguilhem 1927).

É.Bréhier, La création des vérités éternelles dans le système de Descartes, in *La Revue Philosophique*. 1937.

E.Gilson, *La liberté chez Descartes et la théologie*. 1913.

H.Gouhier, *La pensée métaphysique de Descartes*. 1962.

H.G.Frankfurt, Descartes on the Creation of the Eternal Truths, in *The Philosophical Review* Vol.86. 1977.

E.M.Curley, Descartes on the Creation of the Eternal Truths, in *The Philosophical Review* Vol.93. 1984.

野田又夫「デカルトにおける形而上学と自然学」(『サンス』第6冊 1949)